

『栄花物語』における円融天皇像の特色

— その治世の後半 —

川 田 康 幸

序

本論は、一昨年本学の紀要において「『栄花物語』における円融天皇像の特色——その治世の前半——」と題して拙論を展開したものの、続編である。一昨年の紀要で取り上げたものは、円融天皇の誕生から堀河殿・兼通並びにその娘・皇后皇子の死までを、円融天皇の治世の前半とした。そして、その期間における『栄花物語』の中における、円融天皇に対する叙述の特色について考察を加えた。

円融天皇の治世の前半における、『栄花物語』における天皇に対する叙述の特色は二つある。その一つは、円融天皇の「生誕から立太子まで」の叙述の中で見られる。それは、円融天皇を描くに当たって、常に九条殿・藤原師輔への賛美に主眼を置き、「師輔の孫」を強調した文脈の中で記されているということである。さらに、師輔の没後の方が却って外祖父・師輔の回想譚の中で語られるからか、師輔への賛美が中心となり、円融天皇は付け足し・付随的な取り扱いとなる。師輔への賛美は、巻末近くに記される円融天皇即位後の場面でも、強調されるのである。

それとあと一つは、円融天皇の「幼さの強調」である。安和の変の余韻の収まらぬ状況で、十一歳の円融天皇の即位

が行われたのである。そこでは、ことさら

今の上、童におはしませば、つごもりの追儼に、殿上人振鼓などして

参らせたれば、上、振り興ぜさせ給ふもをかし。

(第二「月の宴」、第六
三節。①一六三頁。)

と、帝の幼さを強調する。そしてその、幼帝を補助線として、兼通と兼家並びにその娘たちが対照的に描かれてゆく。
『栄花物語』では円融天皇の「幼さの強調」を通して、幼く若い天皇を手玉にとる、天をも恐れぬ悪逆非道な兼通像と、道徳的で聖人君子のような兼家像を造形しようと意図したのである。その典型が『栄花物語』巻第一の巻末近くに纏められた、円融天皇元服前後の記事に見ることができのではないか。

『栄花物語』巻第一の巻末近くの、円融天皇元服前後の記事には、虚偽が含まれている。単なる年紀や官職の混乱ではなく、意図的な並び変え「史実の改変^註」をしているのではないか。その事が結果として、対照的な兼通像と兼家像を効果的に作りだしている。兼通と兼家に対してまったく正反対の性格づけをする。即ち、兼通イコール悪人と、兼家イコール善人という図式を描きだす。その効果をより高めるために、兼通の娘・皇子の入内と兼家の娘・超子の入内時の、父親たちの官職や、入内当時の後宮の状況をまったく逆転させて描いているのである。また『栄花物語』巻第二の中で描かれた、中宮・皇子の崩御までの一連の円融天皇関連の記事も、兼通の弟・兼家に対する非道な扱いに焦点があてられている。円融天皇はほとんど存在感が無い。円融天皇は堀河院に行幸したことで、堀河殿の婿の如き状態になったのである。堀河殿・兼通に完全に取込まれてしまったのである。

『栄花物語』で円融天皇の治世の前半、兼通・皇子の死までを描くとき、円融天皇は若ければ若いほど都合なのだ。恐るべき狷介な人物・悪逆非道な兼通像をきわだたせるには、若い帝を娘・皇子でたぶらかし恣意的な政をした、と描くことは大変に効果的であろう。その結果、道理を弁えた非の打ち所のない立派な兼家は、兄・兼通から大変惨い扱い

をされたと同情をもって描く。円融天皇は若いので政には関与しないのである。結果として、兼家を助けることはできなかったのである。『栄花物語』の作者はその点を強調するために、円融天皇の幼さ・若さをことさら強調し、兼通のコントロール下にあった無力な天皇として描きたかったのである。そして悪逆非道な兼通の死後、中宮・皇子に対する兼家の「つつまじからず、ないがしろに」したという非道な対処の仕方は当然の報い、因果応報の処遇であると強調し、正統化するのである。兼家の中宮に対する冷酷な処遇は非難されず、却って皇子の方が当然の報いであると諦めたと描く。それ程、兼通は冷酷非道だったのである。

また兼通薨去後の詮子の入内にも虚偽が含まれている。詮子の入内を、関白頼忠の娘・遵子の前として、殊更故兼通と兼家の対立を煽り、当然の措置・報いであったと描く。また兼家は、詮子入内前に既に右大臣であったと記しているが、詮子入内後の昇進である。詮子入内直後、兼家はまだ大納言であった。若い帝を娘でたぶらかし恣意的な政をし勝手気侭に高い地位を望んだ外戚不善の輩は、兼通より兼家の方ではなかったか。

一、皇子の死と、残った女御

円融天皇は安和二年(九六九)八月に即位し、永観二年(九八四)八月に退位する。十一歳で即位し、在位十六年の二十七歳で退位する。関白・兼通は、この間の貞元二年(九七七)十月に関白を従兄弟の頼忠に譲り、弟の兼家に対しては右大将を取り上げ治部卿に左遷し、十一月に薨去する。その二年後の天元二年(九七九)六月三日、中宮・皇子も父の後を追うごとく崩御。兼通、皇子の親子が退場し、太政官と後宮の主役は、頼忠と中宮・遵子の親子に代わるのである。

関白・兼通の死から中宮・皇子の崩御の間の約一年と七ヵ月間は、円融天皇の治世の前半部と後半部分の過渡期と言

えよう。兼通の死を境にして、満を持したごとく関白頼忠と兼家の争いが、後宮を舞台にして始まるのである。それは、中宮・皇子をないがしろにした形で始まる。すなわち、競うような形で、頼忠と兼家の娘達が入内するのである。先ず関白頼忠の娘・遵子が、貞元三(九七八)四月十日に掖庭に入る。ときに遵子は円融天皇より二歳年上の二十二歳^{廿二}、晩婚の部類である。その四ヵ月後の八月十七日、競うようにして兼家の娘・詮子が入内し、梅壺を居所とする。ときに詮子は十七歳^{十七}であつた(表I参照)。

表I (『日本紀略』による。)

年 号	月 日	記 事
貞元二 九七七	十一月 八日	依太政大臣病。太 _二 赦天下 _一 。老人賜 _レ 物。大臣於 _二 堀川院 _一 薨。年五十三。
	四月 十日	左大臣 _二 女遵子 _一 入 _二 掖庭 _一 。准 _二 女御 _一 。被 _レ 免 _レ 輦。
	五月廿二日	宣旨。以 _二 藤原遵子 _一 爲 _二 女御 _一 。
	八月十六日	右大臣以下諸卿參 _二 承香殿 _一 女御遵子方 _二 奏管絃 _一 。天皇渡御。
貞元三 九七八	八月十七日	大納言藤原兼家卿息女初入 _二 掖庭 _一 。候 _二 梅壺 _一 名詮子。
	九月廿一日	小除目。今日。大納言兼家可 _レ 任 _二 右大臣 _一 之由有 _二 宣旨 _一 。
	十月 二日	任 _二 大臣 _一 。太政大臣頼忠。左大臣雅信。右大臣兼家。
	十一月 四日	以 _二 藤原詮子 _一 爲 _二 女御 _一 。

		十一月廿九日	詔。改元爲天元元年。依明年陽五之御慎也。
天元一 九七九	六月 三日	寅刻。皇后藤原皇子崩于堀河院。 <small>年三十三。</small>	
	六月 八日	葬送前皇后。而大雨之間。東河汎溢。寅冠渡河。	

ところが、この辺りのことを『栄花物語』では天元元年(九七八)のこととし、遵子と詮子の入内の順序は逆転する。遵子の入内は、中宮皇子の崩御後と記すのである。巻第二の(一三)・(一四)節では、

かくて年もかはりぬ。左の大臣の御さまいといとめでたし。大姫君を「いかで内に参らせ奉らん」とおぼす。はかなくて月日も過ぎて冬になりぬ。年号かはりて天元元年といふ。十月二日除目ありて、関白殿太政大臣にならせ給ひぬ。左大臣に雅信の大臣なり給ひぬ。東三条殿の罪もおはせぬを、かくあやしくしておはする、心得ぬ事なれば、太政大臣殿度奏し給て、やがてこの度右大臣なり給ひぬ。「これはただ仏神のし給ふ」とおぼさるべし。

(第(一三)節、
①一三六頁)

と、兼通の死後、翌年になると頼忠は遵子の入内を強く願った。ところが決断がつかぬ間に改元が行われ、十月二日に除目が行われた。関白頼忠は太政大臣に昇格する。兼家は頼忠の強い推挙で右大臣任せられ、神仏のお陰であると思つたと『栄花物語』では描く。

そして引き続き、この辺りのことを『栄花物語』では、

内には中宮のおはしませば、誰もおぼし憚れど、堀河殿の御心掟のあさましく心づきなさに、東三条の大臣中宮に怖ぢ奉り給はず、中姫君参らせ奉り給ふ。大殿の、「姫君をまづ」とおぼしつれど、堀河殿の御心をおぼし憚る程に、右の大臣はつつましからずおぼしたちて、参らせ奉り給ふ、ことはりに見えたり。参らせ給へるかひありて、

ただ今はいと時におはします。中宮をかくつつまじからず、ないがしろにきこえ給ふも、「昔の御情なさを思ひ給ふにこそは」と、ことはりにおぼさる。東三条の女御は梅壺に住ませ給ふ。御有様愛敬づき、け近くうつくしうおはします。御はらからの君達この頃ぞつつまじげなうありき給ふめる。

(第(二四)節、
①一二八頁。)

と、娘の入内を願っていた然るべき殿方は、中宮嬪子に遠慮をし、誰もが娘の入内を思い止まっていたと記す。そんな中で、関白太政大臣頼忠と右大臣兼家の動きを『栄花物語』では、故関白・堀河殿を軸に対照的に描きだす。

関白の頼忠は遵子の入内を強く願ったが、故堀河殿の気持を付度して娘の入内を決行すべきかどうか思い悩んでいた。その間に兼家の娘に遅れをとってしまうのである。一方、右大臣兼家は故兼通に遠慮することもなく、詮子の入内を執り行ったのである。兼通薨去後の円融天皇の後宮へ自分の娘を入内させる先陣を切ったのは、右大臣兼家であった。中宮嬪子は、そんな右大臣兼家の惨い仕打ちを、亡き父・兼通と兼家の過去のいきさつを考えて、道理だと考えたと記す。そして詮子は梅壺を住处とする。彼女は魅力的であり、親しみやすくてかわいいのである。

この『栄花物語』の叙述からいくつかの特色が読み取れる。その一は、関白頼忠は結局、中宮嬪子存命中は遵子の入内見合わせるものであるから、実に義理堅く堅苦しいのである。その二、右大臣兼家は、兼通薨去後の「入内競争の先陣を切った」のである。その三、詮子は押しも押されもせぬ「右大臣の女」として入内するのである。詮子が「入内競争の先陣を切った」という点と「右大臣の女」であるというのは、まったくの間違いである。前掲の表Iを参照して頂きたい。

貞元三年(九七八)が天元元年と改まるのは、その年も師走に近い十一月廿九日になってからのことであり、遵子の入内はその七ヵ月も前である。その年の夏・四月十日に女御の参内に准じた形で執り行われていた。そして翌五月廿二日には早々と女御の宣旨を受けている。頼忠は亡き兼通に遠慮して、義理堅くぐずぐずと遵子の入内を引き延ばしたりは

していなかった。兼通薨去後の「入内競争の先陣を切った」のは頼忠である。加えて、遵子の入内を女御に準じた形をとっていたのである。関白の娘として遵子は、最初から丁重に扱われたのである。最初から女御に準じた形での入内は、あの何事につけても強引な兼家の場合も、詮子の入内には女御に準じた形を取ることは出来なかった。頼忠は関白として、誰に遠慮することもなく遵子の入内を執り行ったのである。詮子は「右大臣の女」として入内したとしているが、入内時の兼家の官職は大納言であり、「右大臣の女」ではないのである。詮子の入内は遵子に遅れること四ヶ月の、八月十七日のことである。また大納言兼家が右大臣に任ぜられたのは、その二ヶ月後の十月二日のことであった。

詮子を「右大臣の女」として入内させたいとすれば、天元元年と改元した後の入内ならば、齟齬はないのである。また遵子の入内を、詮子の後としたならば、皇后皇子崩御後、詮子には円融天皇の先妻としての地位が、自ずと生じるのである。皇后皇子もこの詮子の入内を、積極的とはいえないが当然のこととして許容しているのである。この入内順序の逆転は「梅壺の女御詮子を重視したためであり、また、兄兼通の仕うちに対する兼家の復讐心のはげしさを強調しようとしたもの」^註だけではないのである。加えて遵子は後妻なのである、と読者に強く印象付けたいのであろう。詮子が先妻で、遵子が後妻というこの「栄花物語」の改変は、後の展開に重要な伏線となっていくのである。

加えて、兼通を軸に考えると、兼家と頼忠に対する生前の関白兼通の仕打ちは、正反対である。兼通は兼家に対しては抑圧者であり、頼忠に対しては引き立て役であり大恩人なのである。兼通は九条殿の息子でありながら、九条殿の一族・弟兼家には冷酷なのである。反対に余所人には仁慈なのである。詮子は父が、皇子の父の被害者であった。兼家は男性らしく逆境にあっても強く堂々としており、頼忠は義理堅く堅苦しい人物として描かれている。

兼通薨去後に入内し、帝の寵愛の深い詮子に、以外に早く立后のチャンスが訪れる。彼女が入内した翌天元二年には、中宮皇子が崩御してしまうのである。その辺りのことを「栄花物語」では、

かかる程に天元二年になりぬ。梅壺いみじう時めかせ給ふ。中宮月来御心地あやしう悩しうおぼしめされて、よろづ宮司も、又公よりも、御祈の事さまざまにいみじけれど、六月二日うせさせ給ひぬ。あへなう、あさましうあはれにいみじうおぼしきこえさせ給へどかひなし。世の人例の口安からぬものなれば、「東三条殿の御幸のますぞ、梅壺の女御后に居給ふべきぞ」などいひののしる。

(第「二五」節、
①「三〇」頁、)

と、天皇や宮司の手を尽くした安産の祈りの甲斐もなく、中宮嬪子は数ヶ月間悩んで、六月二日には崩じてしまう。天皇はあまりの呆気無さにとても悲しまれたと記す。人々は口々に兼家は幸運だ、詮子が立后するのは間違いないとか大騒ぎをしたと記す。これは当然の見方であろう。なぜなら、後宮に残された妃は、兼家女の女御・詮子のみとなった。兼家以外、他の人々は故中宮嬪子に遠慮して、誰も娘を入内させていなかった。その詮子は帝の寵愛がとても深いのである。『栄花物語』では、「世の人」の口を借りて、詮子の立后を当然視しているのである。

この間頼忠の方はどうかというと、

関白殿は中宮の御事どもを行ひきこえ給ふ。ただ今の世の御後見にもおはします。堀河殿の御心をもさまざまおぼしめし知り、何事も扱はせ給ふなるべし。

(第「二五」節、①「
三〇」頁、)

と、帝の後見役でもあり、故兼通の恩義に報いるためにも、中宮嬪子の葬儀万端を執り行つたと記す。頼忠は誠に律儀な人物である。だが、どこか融通のきかない堅苦しい人物という印象が拭えないのではないか。

嬪子の葬儀は、天元二年六月八日に、最愛の妻を亡くした帝の悲しみを表わすが如き大雨が降り、賀茂川の氾濫する中で執り行われた。

二、若宮の誕生と遠慮し恐れる天皇

堀河殿とその娘中宮・嬪子の死後は、円融天皇の治世の後半部分になる。当然円融天皇の治世の後半では、兼通と兼家の軋轢は消滅する。しかし、新たな軋轢が頼忠と兼家の間に発生し展開する。その軋轢の中心が、頼忠の娘と兼家の娘の立后をめぐる争われるのである。

中宮・嬪子の死後、しばらくおいて天元二年の冬、頼忠は娘・遵子の入内を実行する。その辺りのことを『栄花物語』では、

その冬関白殿の姫君内に参らせ奉り給ふ。世の一の所におはしますれば、いみじうめでたきうちに、殿の御有様なども奥深く心にくくおはします。梅壺はおほかたの御心有様け近くをかしくおはしますに、この度の女御は少し御覧の程やいかにと見えきこゆれど、ただ今の御有様に上も従はせ給へば、おろかならず思ひきこえさせ給ふなるべし。

(第(二六)節。
①一三三頁。)

と、遵子は関白の娘でもあり、帝は疎かにはなさらない待遇をなさったと記す。衆人監視の中、入内の甲斐もあったのである。その様な中でも『栄花物語』では、詮子に対しては「御心有様け近くをかしくおはします」と、親しみやすく愛らしいと賛辞は欠かさないのである。遵子の場合「関白の女」という点が強調されるのに対して、詮子はその人自身に魅力があると記している。『栄花物語』では詮子と遵子を比較し、詮子の方がずっと遵子よりずっと人としてチャームングで魅力的な女性なのであると、強調しているのではないか。

そして第(一七)節に入ると、詮子の懐妊が明らかとなる。

いかにしたる事にか、かかる程に梅壺例ならず悩ましげにおぼしたれば、父大臣いかにいかにと恐しう思ひきこえさせ給へば、ただにもおはしまさぬなりけり（中略）みかどいみじううれしうおぼしめさるべし、一品の宮も、梅壺をば御心よせ思ひきこえさせ給へば、いと嬉しうかひあるさまにおぼしきこえさせ給ふ。里に出でさせ給はんとするを、上いと後めたうわりなくおぼしめしながら、さてあるべき事ならねば、出でさせ給ふ程の御有様いへばおろかなり。さべき上達部・殿上人皆残るなう仕うまつり給ふ。世は皆この東三条殿にとまりぬべきなめりと見えきこえたり。

（四二三）

円融天皇の喜びは一人である。帝と同母の姉・一品の宮・資子内親王も、詮子を最肩にしていたのでその甲斐があったと、とても喜んだと記す。懐妊したので宮中にも置いておけないので、里下がりの時の様子はすごかった。然るべき縁故のある人々すべてがお仕えした。天下の衆望は東三条殿・兼家の上に留まったように見えたと記す。

兼家には、冷泉院の男親王が既にいる。更にここで、今だに一人の内親王さえいない円融天皇に男親王が誕生すれば、天下のことは兼家の側から離れる訳がないのである。大変な騒ぎになったであろう。

続く第（一八）節では、今だ一人の御子の誕生をも見ていない円融天皇の、女御懐妊の喜びの様を描く。

上も年来にならせ給ひぬれば、今は下りさせ給はまほしきに、いかにいかに御子のおはせぬ事をいみじうおぼし歎くに、男・女の御程は知らず、ただならずおはしますをよに嬉しきことにおぼしめして、さべき御祈ども数を尽させ給ふ。長日の御修法・御読経など内方よりも始めさせ給ひ、すべてかからんにはいかでか見えさせ給ふ。関白殿いと世の中むすばれすずろはしくおぼさるべし。「さはれ、とありともかかりとも我あらば女御をば后にも据ゑたてまつりてん」とおぼしめすべし。

（第（一八）節。
①一三五頁。）

と、円融天皇は在位期間も長くなり、退位したいと願っていた。しかし、子どもがいないのを大層残念なこととお嘆き

一方、詮子の側が安産の祈祷などと、円融天皇を巻き込んでかまびすしくなればなる程、関白頼忠は気持が塞ぎ、面白くなる。そして自分がいる限りはと、かたくなに女御遵子の立后の事を目論んだと記す。関白頼忠は円融天皇とは外戚関係には無いのである。権力基盤の非常に脆弱な関白と言えよう。一方競争相手の、東三条殿兼家の方は右大臣ではあるが、円融天皇の外戚・叔父にあたる実力者である。加えて冷泉院の御子・居貞親王の外祖父でもある。心中穏やかでは居られない関白頼忠の気持が描かれている(系図Ⅰ参照)。



第(一七)、「(一八)節では、帝をはさんで意氣軒昂な兼家と、心中穏やかでは居られない関白頼忠を対照的に描く。そして引き続き、第(一九)節では、詮子の懷妊と懷仁親王の誕生を描く。即ち、

はかなくて天元三年庚辰の年になりぬ。三四月ばかりにぞ、梅壺さやうにおはしますべければ、その御用意ども限なし。内蔵寮に御帳よりはじめ、白き御具ども仕まつる。殿の上にもせさせ給ふ。ただ今世にめでたき事の例になりぬべし。内より夜昼分かぬ御使暇なし。げにことわりに見えさせ給ふ。(中略)六月一日寅の時に、えもいはぬ男御子平かにいささか悩ませ給ふ程もなく生れさせ給へり。内にまず奏せさせ給へれば、御劍奉らせ給ふ程ぞ、えもいはずめでたき御けしきなるや。七日の程の御有様思ひやるべし。東三条の御門のわたりには、年来だにたはやすく人渡らざりつるに、院の宮達の三所おはしますだにおろかならぬ殿の内を、まいて今一の宮のおはしませば、いとことばりにて、いづれの人もよろづに参り騒ぐ。御はらからの君達、年来のみ心地むつかしうむすばれ給へりける、紐解き、いみじき御心地どもせさせ給ふ。

第(一九)節。①
(三六)頁。

天元三年(九八〇)の三々四月ごろ臨月を迎えるはずなので、詮子の出産準備は準備万端、際限が無いほどに整えられた、と記す。そして、内蔵寮からは御帳台を始め、白色の様々な準備用品が届けられる。兼家の方でも準備をする。その様子は此の世の、めでたい先例となるであろう。天皇からも昼夜をわかない使者がやってくると、手放しの絶賛である。六月一日、円融天皇にとって最初の子どもが、詮子の腹に誕生するが、大変めでたいことにその御子は安産で、とても素晴らしい男御子であった。天皇は大層お喜びになり、早速に御劍を賜わったと記す。

ここ数年来人々が寄り付かなかった、兼家の東三条第には誰も彼もが雲霞の如く集まり参じ、大変な騒ぎとなった。気持が逼塞し、塞ぎの虫に取り付かれていた詮子の兄弟達も、この様子ですっかり気持が楽になり、大変元気になったのである。東三条第に人々が再びご機嫌伺いに参集するようになったのは、冷泉院の皇子が三人に加えて、今上陛下の

一の宮がいらっしやるからであると、『栄花物語』その理由を記す。誠に現金な人々の動きである。男女の別がつかない御子の生まれる前から、詮子の妊娠が判明し里下がりをした途端、第(一七)節では「世は皆この東三条殿にとまりぬべきなめりと見えきこえたり」と人々の予想を述べさせる。兼家など、東三条家の期待と喜びが大きかったのである。円融天皇の一の宮の誕生という何にも代え難い、願ってもない幸運が飛び込んできたのである。だが兼家たちにとって、喜びが大きい反面、落胆も非常に強いのである。何故ならば、円融天皇がなかなか兼家に打ち解けた様子を示されないのである。例えば、

かかる程に、又ことし内裏焼けぬ。みかど閑院にわたらせ給ふ。閑院は故堀河殿の御領にて、朝光の大納言ぞ住み給ひける、ほかにわたり給ひぬ。

(第(二〇)節。
①二三九頁。)

と、天元三年の内裏の火事で焼けだされた円融天皇は、兼家と対立し右大将まで取り上げて、冷酷に処遇した故関白兼通の持ち物の閑院へ渡御されたのである。閑院に住んでいた朝光は、外へ移ったと記す。

円融天皇は、関白兼通や中宮嬪子の没後も、故堀河殿の一族に気安く接している。堀河殿の一族への信頼が厚いのである。であるからこそ閑院を里内裏として利用されたのである。円融天皇は東三条第の利用には抵抗があるのである。円融天皇の信任がなかなかに得られない兼家の苛立ちが伺える描き方である。

実際には天元三年の内裏の火事は、十一月二十二日に発生した。内裏の殿舎が悉く焼失すると記されるほどの大火である。天皇はその日は、まず中和院に避難され、その後職御曹司に避難されたのである。翌日にはその職御曹司に、一品資子内親王もお移りになった。

○奏宣命之間。從主殿寮人等候所。火焰忽起。天皇御中院。女御遵子移左近府少將曹司。一品資子内親王移縫殿寮。前齋院尊子移本家。此間。諸殿舎皆悉焼亡。所殘采女町。御書所。桂芳坊等也。戊時。天皇移職

曹司^一。

○今夜。一品資子内親王。自里第二移^三職御曹司^一。

【日本紀略】天元三年
十一月二十二日条
【日本紀略】天元三年
十一月二十三日条

その後一ヵ月後には、天皇は太政官庁にお移りになる。だが閑院に渡御された記事は見当らない。但し翌天元四年（九八一）も内裏周辺は火事に見舞われ、七月には、四條後院すなわち太政大臣頼忠の四條坊門大宮第を後院・里内裏とされ、お移りになる。

壬寅。天皇遷^二御四條後院^一。太政大臣四條坊門大宮第也。以之爲後院^一。

【日本紀略】天元
四年七月七日条

すなわち、天元三年十一月の内裏の火事の後、円融天皇は職御曹司、太政官庁とお移りになるが、里内裏にお移りになった記事は記されていない。翌天元四年七月になって始めて、頼忠の四條坊門大宮第を里内裏としてお使いになったのである。天元三年中の里内裏の使用、あるいは閑院を里内裏とした記事は見当らない。円融天皇は天元三年の内裏の火事では、翌年の七月から新造内裏が完成するまでの一期間、関白頼忠の第を里内裏にされたのである。閑院を里内裏とする記事は見当らない。言い替えれば、関白頼忠を信頼していたと言えるのではないか。

一方『栄花物語』の描き方では、関白頼忠より堀河殿の一族への信頼が厚い、と言うことになるのではなからうか。

あるいは兼通と兼家の激しく、厳しい兄弟の争いを反映しているのであらうか。だが、堀河殿・関白兼通や中宮皇子は既に死亡している。東三条殿・右大臣兼家や女御詮子の競争相手ではもはやなくなっている。過去の人であり、同じ九条殿の子息と孫娘である。師輔を賛美する描き方をすれば、師輔の子孫が帝の信頼を得ると描くのが一番の方法である。であるからこそ、閑院を火災の際に里内裏とされたと描いたのではなからうか。遵子よりずっと寵愛が厚く、人間的魅力的の豊かな、詮子の腹に天皇の一番最初の皇子の誕生を見たのである。だが、円融天皇は関白太政大臣の頼忠に遠慮し、恐れていらしかった。『日本紀略』の記事の如く、九条殿の競争相手の小野宮系の頼忠を信頼されてはまずいのであ

る。だから堀河殿の閑院が、内裏火災の折に里内裏となつたのである。兼家の不満は募り落胆は増幅するのである。

三、天元三年の後半と尊子内親王の入内

第〔二〇〕節では、天元三年の内裏の火事で焼けだされた円融天皇が、閑院へ渡御されたと記す。そのあと引き続き、里内裏の帝と関白頼忠や兼家の周辺に話題が進行する。すなわち、

かくて関白殿の女御候はせ給へど、御はらみのけなし。大臣いみじう口惜しうおぼし歎くべし。みかどいつしかといみじうゆかしう思ひきこえさせ給へば「御子忍びて参らせ給へ」とあれど、世の人の御心ざまも恐しうて、すがすがしうもおぼしたたず。今年いかなるにか大風吹き、なるなどさへふりて、いとけうとましき事のみあれば、上は若宮の里におはします事をいとど後めたうおぼしの給はすれど、さりとて内の狭きにおはしますべきにあらねば、ただいかにとのみ夜昼分かぬ御使あり。御五十日や百日など過ぎさせ給て、いみじうつくしうおはします。

東三条に行幸あらまほしうおぼせど、太政大臣の御心におぼし憚らせ給ふなるべし。

(①一三)
九頁

と、関白頼忠の娘・遵子はずっと帝の側に侍っていたが、いっかな妊娠の気配が無いのである。『栄花物語』では、遵子に妊娠の兆候がない頼忠の気持を、大層残念に思い嘆かれているに違いないと推量する。一方、帝は新しく誕生した皇子にあいたいと強く願うのである。帝からは「お忍びでも良いから参上させなさい」と催促するが、世の中の人の心の中での企みも恐ろしく、兼家ははかばかしい返事をしない。また今年は大風が吹いたり地震が置きたりと、とても嫌なことばかりあるので、帝は若宮が実家にいることを大層心配される。とは言え里内裏が狭く、若宮のいらっしゃる所もない。そこで帝からは若宮の様子を問う、夜昼の区別のない使者が派遣される。若宮は五十日、百日のお祝など経過

し、大層可愛らしくていらっしやる。帝は東三条に行幸されたいとお思いになるが、太政大臣頼忠の氣持に配慮して、東三条への行幸を遠慮していらっしやるのであろう。

『栄花物語』では若宮誕生後の様子をこのように描く。円融天皇の態度は、若宮に会いたいとあれこれと悩んでいるだけで、煮えきらないのである。円融天皇の態度は落ち着いた王者の風格がないのである。帝であれば、関白に何の遠慮があるものか。堂々と兼家の東三条第まで行幸なされば良いのに。兼家の不満がますます募るのである。

内裏を焼けたされた帝は、関白太政大臣頼忠に遠慮して、誕生した皇子にあうことすら出来ないのである。六月に皇子が誕生し、内裏の火災まで約六ヶ月弱の期間がある。この間政情不安を理由に、右大臣兼家は詮子や皇子を参内させ、父帝との対面をさせないのである。兼家の不満が良く現われて見える部分ではないか。

また、「世の人」とは頼忠等のことであるとすれば、その心の中の企みが恐ろしいと、非難していることになる。若宮に対して何事を企むかわからぬほど、頼忠の性格は恐ろしく危険なのである。「世の人の御心ざまも恐し」と兼家は不安を感じたとするが、見方を代えると、兼家にはそれだけ反対派が大勢いたことになる。

誠に円融天皇の態度は煮え切らないのである。そこで第(二一)節では、その様な帝の性格を、きちんとして端正ではあるが、男らしく果敢な性格ではないと世の中の人は見ていると批判的に描く。帝の性格がその様なので、右大臣兼家は思うことは充分成し遂げられたと思うが、それでも警戒心は解かないように見えたのであると記す。帝の不甲斐無い態度に対する、詮子や皇子を参内させない理由である。

みかどの御心いとうるはしうめでたうおはしませど、「雄雄しき方やおはしませざらん」とぞ、世の人申し思ひたる。東三条の大臣世の中を御心のうちにしそしておぼすべかめれど、猶うちとけぬさまに御心もちるぞ見えさせ給ふ。みかどの御心強からず、いかにぞやおはしますを見奉らせ給へればなるべし。

右大臣兼家はしっかりしているのである。そして、帝は心持ちにしっかりしたところがなく、全幅の信頼が置けない、一抹の不安が残る性格だと兼家は見ていると、かなりきつく記している。

だが果たしてそうか。天元三年の六月一日から暮れにかけての、関連する記事を拾い出して次に示す。(表Ⅱ参照)

表Ⅱ『日本紀略』による。

月 日	記 事
六月 一日	壬申。寅冠。女御藤原詮子産第一皇子。名懷仁。
七月 九日	午後。大風暴雨。宮中樹木。諸門。羅城門等顛倒。東西京人宅多以破損。
七月十五日	夜。大雨降。洪水溢。東西京中等如大河。舍屋流損甚多。
七月二十日	於清涼殿新誕皇子五十日。有御遊。
八月 一日	辛未。以第一皇子懷仁爲親王。
八月十三日	右衛門府獻異鳥。近江國所進也。
九月十三日	盜入弘徽殿女御(蓮子)御曹司。掠取器物。東宮帶刀藤原景澄之所爲也。
十月二十日	前齋院尊子内親王初參候麗景殿。 <small>冷泉院皇女也。</small>
十一月廿二日	奏宣命之間。從主殿寮人等候所。火焰忽起。(中略)諸殿舍皆悉燒亡(中略)天皇移職曹司。
十二月 一日	但馬守堯時宅。強盜數十人入。盜財物。
十二月廿一日	庚寅。天皇遷御太政官廳。

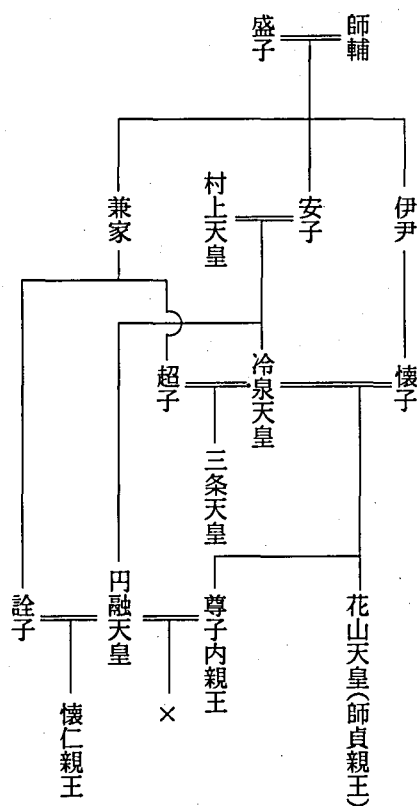
六月一日に女御詮子が第一皇子を生んでから、十一月二十二日の内裏の火災まで、約六ヵ月弱の期間がある。七月に大暴風雨と洪水がある。だが地震の記事はない。地震の頻発した記事は、四年前の天延四年(九七〇)六月十八日の大地震の発生から、翌貞元二年にかけての群発地震の記録である。^註だが、天元三年には地震の記事は記録されていない。

「けうとましき事」とあるが、七月二十日には清涼殿で一の皇子の五十日の祝賀が行われたり、八月一日には懷仁皇子の立親王の式が行われるなど、世情不安を助長するような事件の発生は見られない。祝賀行事である。八月十三日の近江国より献上「異鳥」は凶事なのか瑞祥か判断がつかないが、十月二十日の冷泉院の娘・尊子内親王の入内等も祝事である。尊子内親王は、『栄花物語』では「いみじう美しげに光るやうにておはしましけり」(巻第一、第七〇節)と、描かれた女性である。それとも尊子内親王の入内は、兼家にとって疎ましいことであつたのか。九月十三日の弘徽殿女御・遵子の曹司に盗賊が入ったことや、十二月一日に但馬守堯時宅に乱入した盗賊団の事件は、疎ましきことであらう。特に、弘徽殿女御・遵子の曹司に盗人が入った事件は、時の関白頼忠の力量が示された事件であらう。自分の女の曹司に盗賊を侵入させるなど、関白を貶しめるには格好の事件である。関白を馬鹿にし、その威厳の無さを露呈させた事件である。世情不安を助長するものであるが、右大臣兼家を利するものであらう。

また、十月二十日の尊子内親王の入内などは、関白頼忠に対する遠慮の無い行いである。詮子退出後は、円融天皇の後宮には遵子しか残っていないのである。そこへ詮子の代わりの如く、尊子内親王が入内するのである。関白頼忠の立場で考えれば、九月十三日の弘徽殿の曹司への盗賊事件と同様に、関白頼忠を貶しめる行いであり、後宮での弘徽殿女御・遵子の影響力を殺ごうとするものではないか。とすればこれも、右大臣兼家を利するものであらう。尊子内親王の入内を推進したのは右大臣兼家ではなかったか。兼家としては、詮子退出後の後宮での関白家の影響力をできるだけ殺ぐために、画策したとも考えうるのである。

何故か。尊子内親王は十五歳であり、入内の適齢期であり、その母は女御懷子である。尊子内親王の母も、後見である祖父の摂政伊尹も既に此の世にはいない。尊子内親王の入内の話が持ち上がった場合、円融天皇は拒むことは出来ない立場の女性である。尊子内親王は先帝の兄・冷泉院の姫皇女であり、東宮・師貞親王の姉宮である。冷泉院から話があった場合、円融天皇は尊子内親王を後宮に受け入れ、その後見をしなければならないのである。まして現関白頼忠としては絶対に反対出来ない立場の女性である。(系図Ⅱ参照)

系図Ⅱ



言うまでもなく伊尹は円融天皇の摂政であつた。兼家は懐子の叔父であり、『大鏡』によれば兄伊尹と共に安和の変を策謀した人物とされ、円融天皇の立太子を画策した中心人物と目される。その意味で兼家と伊尹は近いのである。兼家は師輔の子息の中でも、特に中宮安子の同母兄弟で、唯一生き残っている人物でもある。九条殿の一族を取り纏める中心人物となっていたのである。師輔の息子として、一族の女御たちの生んだ皇子・皇女たちの世話をする義務が生じるであろう。また冷泉院の後宮には兼家の娘・超子が健在である。超子を通して冷泉院に働きかけることなど造作も無いことであろう。最初から、尊子内親王の入内を推進したのが兼家であつたとしたら、兼家は九条殿の一族の面倒を厚く見る立派な人物であると評価されよう。表向きは冷泉院であるが、後に實際は兼家が推進したと判明した場合、兼家は隠徳をつんだと評価されよう。

すなわち、尊子内親王の入内の目的の一つは、詮子不在の円融天皇の後宮で、関白の娘・弘徽殿女御・遵子の影響力を殺ぐものであつた。詮子不在の後宮に尊子内親王を送りこむことで、円融天皇の遵子への寵愛を半減させ、集中するを防ぐことが出来る。加えて、円融天皇の後宮に右大臣の目を光らせておく事が出来たのである。右大臣の監視の目を光らせておく点から考えれば、尊子内親王の入内直前の九月十三日の弘徽殿女御の曹司へ侵入した、東宮帯刀藤原景澄の偷盗は誠に不思議な事件である。東宮と言へば、尊子内親王の弟である。尊子内親王の入内を潰すための策謀だろうか。それとも藤原景澄は単に器物を盗むために、弘徽殿の曹司へ侵入したのであろうか。あるいは政情不安を掻き立てるためだろうか。関白の権威が失墜するのは当然である。それとも後宮の情報を探ろうとしていて、しくじったのであろうか。後宮に足掛かりさえあれば、情報収集などにこのような危険を侵す必要は無い。それともまた何かもっと別の目的があつたのだろうか。

その二つは、尊子内親王の入内を右大臣兼家が推進したとしよう。そうすれば、右大臣兼家は九条殿の一族の中で、

一族の面倒を手厚く見る人物であると評価されるのである。いろいろな意味で、尊子内親王の入内は、九条殿の一族の頂点に立った右大臣兼家にとって好都合なことであった。冷泉院や東宮を説得してでも推進すべきことであつたらう。

この尊子内親王の入内は『栄花物語』では、天元四年の冒頭の、円融天皇が讓位を祈願されたという記事のあとに続く。そこでは、

堀川の大臣おはせし時、今の東宮の御妹の二の宮参らせ給へりしかば、いみじうつくしうともて興じ給ひしを、参らせ給て程もなく、内など焼けにししかば、「火の宮」と世の人申し思ひたりし程に、いとかなううせ給ひしに
なん。

(第(二二)節。
①一四三頁。)

と、尊子内親王の入内は、兼通の生きていた時代としている。思い出したから記しておくといった風な、回想的な扱いになっているのである。だが「堀川の大臣」を太政大臣(頼忠)に読み代えれば、天元三年の後半の回想としてはぴったりの位置に記されている。帝は尊子内親王を大層「うつくし」と大事にされた。入内されたあと間もなく内裏の火災があつたので「火の宮」と世間ではうわさしたが、呆氣無くお亡くなりになったと記す。ここからは薄幸の内親王というイメージが浮かび上がる。尊子内親王の入内を推進した人々に、愛情が欠けていれば、入内後は薄幸とならざるを得ないだろう。尊子内親王の入内の状況が良く描かれている部分である。尊子内親王は、右大臣兼家と関白頼忠の後宮を舞台とした争いに、当面の利益を受ける側・兼家側の手駒として利用されたのではなからうか。利用価値が無くなると、入内を推進した人からは見捨てられ、忘却されたのである。

尊子内親王は「火の宮」等と噂され呆氣無く死を迎えた薄幸の麗人であつた。だが、入内の甲斐もあり、入内直後から「いとかなううせ」るまで、帝の寵愛も大変厚かつたことが伺える。詮子退出後の後宮で、帝の寵愛を遺子が独占するのを防ぐには、とても効果があつたのである。

天元三年六月の懷仁親王誕生から年末までは、尊子内親王の入内が大きな事件であった。関白頼忠の娘・遵子だけが帝の愛を独占することは出来なかった。だが『栄花物語』では、その様な重大な事柄が欠落している。そこでは、男らしく果斷な性格ではないと、円融天皇を批判的に描く。帝の性格が優柔不斷なはつきりとした性格なので、右大臣兼家は懷仁親王を得たが、警戒心は解かなかったと記す。円融天皇が懇請しても、詮子や懷仁親王を参内させない理由である。帝の不甲斐無い態度に対する、右大臣兼家の不満が鬱積してゆくのである。天元三年はこれのようにして暮れるのである。

四、立后の争い

天元三年六月に、右大臣兼家は円融天皇の一の宮・懷仁親王を得たが、兼家は却って不満が募って新たな年を迎える。かかる程に天元四年になりぬ。みかど御心のうちの御願などやおはしましけん、賀茂・平野などに、二月に行幸あり。「御子の御祈などにこそは」と、ことわりに見えさせ給ふ。みかど「今は御子も生れさせ給へり。いかでおりなん」とのみおぼし急がせ給ふ。梅壺の女御の里がちにおはしますを、安からぬ事に上おぼしめせど、大臣、「我一人の人にあらぬを、何かは」などおぼしめすなりけり。

(第〔二二〕節。
①―④三四頁)

円融天皇は、第〔二八〕節で記された如く、天元四年(九八二)の冒頭部分でも退位したいとの願いが強いのである。ただ天元二年末の頃とは違って、今回は懷仁親王という一の皇子がいる点が異なる。帝は二月になってから、懷仁親王のためであるう、賀茂社や平野社へお出かけになり祈願をされる。そして自身の退位の件を急かせるのである。帝の不満は、梅壺の女御・詮子が里がちである点にある。右大臣兼家は、自分は一の人・関白でもないから、どうして帝の思い

通りにと、思ったと記す。兼家は詮子親子を実家に人質に取って、詮子を参内させないことで、円融天皇を心理的に追い込んでいたのである。右大臣兼家と円融天皇との間は陰悪な状態である。

一方、関白太政大臣頼忠と円融天皇の間はとても良好である。帝は何くれとなく太政大臣頼忠に氣を使うのである。それがまた兼家の氣に触るのである。その辺りのことを、つぎの第(二三)節で

みかど、太政大臣の御心に違はせ給はじとおぼしめして、「この女御后に据ゑ奉らん」との給はすれど、大臣なまつつまして、「一の御子生れ給へる梅壺を置きてこの女御の居給はんを、世の人のいにかはいひ思ふべからん」と、「人敵はとらぬこそよけれ」などおぼしつ過ぐし給へば、「などてか。梅壺は今とはありともかかりとも必ずの後なり。世も定めなきに、この女御の事をこそ急がれめ」と、常にの給はすれば、嬉しうて人知れずおぼし急ぐ程に、今年もたちぬれば、口惜しうおぼしめす。かかる事ども漏り聞えて、右のおとど内に参らせ給ふ事難し。女御の御はらからの君達などもまいてさし出でさせ給はず。女御も心解けたる御けしきもなければ、一品の宮は世にいふ事を漏り聞き給ひて「さやうにおぼしたるにこそ」と、世を心づきなくおぼしきこえさせ給ふべし。

(第(二三)節)
①—二四六頁—

円融天皇は、関白頼忠の思いに沿うようにとお考えになり、「弘徽殿女御・遵子をお后に据えよう」とおっしゃる。一方、頼忠は変に慎ましくて、「一のみ御子のお生まれになった梅壺女御・詮子を指し置いて、自分の娘の女御が后になることは世間の人がどう言うだろうか」とお思いになる。また「人の恨みなど買わぬがよい」等とお思いになって、そのままにしていた。円融天皇の方は、「何を遠慮している。今はそうでなくても詮子は必ず后の位に昇る方だ。一定して変わらない世の中など無いのに。弘徽殿女御・遵子の急がれるのが良からう」と、常日頃おっしゃっていた。関白は帝のお氣持がうれしくて、内々に準備をなさる間に天元四年も暮れてしまったので、残念にお思いになる。このような

ことが漏れ聞こえて、右大臣は参内されることは殆ど無い。梅壺女御の兄弟たちもまして参内させる様な事はおさせにならない。梅壺女御の方も円融天皇に心を許すような様子もないので、帝の姉の一品の宮も世間の噂を漏れ聞いて「その様に弘徽殿女御の立后を考えておられるからだろう」と、世の中の動きを不愉快に思っている。『栄花物語』では、遵子立后に積極的な円融天皇、恨みを買うのを恐れ変に遠慮深い関白頼忠、円融天皇の思召しに対して怒り狂っている右大臣と詮子、詮子を応援している帝の姉・資子内親王という、人物配置をする。

円融天皇は関白の娘・弘徽殿女御の立后に積極的なのである。右大臣の娘の梅壺女御の方は円融天皇の一粒種の懐仁親王の母である。懐仁親王が即位すれば、詮子は将来かならず后の位に上る人である。だから今は立后を急がなくても良いとの考えである。それよりどうなるかわからない世の中であるからと、関白の娘・遵子の立后を急かされるのである。数ヶ月とはいえ、遵子の方が詮子より先妻にあたるのである。懐仁親王の母とはいえ詮子は後妻である。懐仁親王を手中にしている右大臣を全く恐れていない、毅然とした天皇の姿が伺える。順逆の判断をわきまえた、また先妻とはいえ今だ御子の誕生を見ない娘の父・関白の心をしっかりと捉えた、非の打ち所の無い立派な帝の判断である。更に加えて、一人の人物・右大臣兼家に過度の権力が集中するのも防ぐことが出来よう。

円融天皇は天元三年の頃からしきりに退位を願っていたとある。その場合、冷泉院の皇子で現東宮・師貞親王の次の皇太子に誰を立てるかが問題となる。円融天皇は当然一粒種の懐仁親王の立太子を願う。その場合外戚関係の無い関白の反対を、最初から摘んでおくには、遵子立后で関白にしっかりと恩を売っておけば都合が良い。関白頼忠は義理難いのである。遵子立后と懐仁親王の立太子には同等の取引でもある。関白頼忠の反対は最初に摘める。右大臣は勿論反対は出来ないであろう。右大臣は懐仁親王即位の折には、外祖父として摂政なり関白に就任できるのであるから。その様に帝は判断をされたのかもしれない。

第(二二)節で「雄雄しき方やおはしまさざらん」と批判されるような点は皆無である。こ自分の考えをしっかり持った立派な雄々しい天皇ではないか。第(一九)節の如く、円融天皇の一の宮・懷仁親王の誕生で「いづれの人もよろづに参り騒ぐ」といった、世間の人々が皆恐れ靡いている右大臣兼家などを全く恐れる風も無い、王者の風格を持っている天皇である。右大臣兼家の出来ることと言えば、「右のおとど内に参らせ給ふ事難し」と、帝を恨んで拗ねて自第で子ども達と共に引き籠もっているしか無いのである。里内裏が関白頼忠の四条坊門の大宮第となった、天元四年七月七日以降はそうであったかも知れない。だがこれは『栄花物語』の中で描かれた状態であり、現実は少し異なっていたのではないか。新造内裏に移るのは十月二十七日でありそれ以降は参内しているのではないか。少なくとも、天元五年正月には兼家は出仕しているし、詮子も新造内裏に参上している。『栄花物語』第(二三)節では、詮子の立后を支持するあまり、却って円融天皇の王者らしい面を浮き立たせてしまっているのである。右大臣兼家は手も足も出ないのである。この頃、詮子は不満があっても宮中にいるのである。東三条殿にいたとは書いてない。

その後天元五年に移り、まず最初に冷泉院の女御・超子の庚申待ちの頓死事件が詳しく記される。そして、第(二四)節から女御遵子の立后の様子が描かれる。^{註十一}

かかる程に、天元五年になりぬ。三月十一日中宮立ち給はんとて、太政大臣急ぎ騒かせ給ふ。これにつけても右大臣あさましようのみよろづ聞しめさるる程に、后たたせ給ひぬ。いへばおろかにめでたし。太政大臣のし給ふもことわりなり、みかどの御心掟を、世の人も目もあやにあさましき事に申し思へり。一の御子おはする女御を置きながら、かく御子もおはせぬ女御の後に居給ひぬる事、安からぬ事に世の人なやみ申して、「素腹の后」とぞつけ奉りたりける。されどかくて居させ給ひぬるのみこそめでたけれ。

(①二五)
三頁

三月十一日に遵子の立后が行われた。太政大臣頼忠はその準備に気が急いて大わらわである。右大臣兼家は万事意

に添わぬあきれた事と聞いている内に、立後のことが行われた。立後のことは素晴らしい。太政大臣頼忠のすることは娘の立後のことでもあり、道理にかなっている。しかし帝のお考え、お心構えについては、世間の人も正視出来ないほど惨いことだと噂した。一の皇子のいらっしゃる女御を差し置いて、このように皇子もいらっしゃらない女御を后に立てるなど、穏やかな事でないと思われ、世の人も非難して、「素腹の后」と渾名をつけた。しかしこの様に后がいらっしゃる事は素晴らしい。この様に描く。

堀河殿の娘の中宮子がお亡くなりになって以降、中宮位は長らく空白であった。帝にはきちんと中宮がいるべきなのである。軽蔑され、非難されるような人でも后が存在することは素晴らしいと原則論を記す。梅壺の女御詮子に肩入れしている『栄花物語』の作者の、齒軋りしている様子が行間に良く表れている場面である。

遵子の立后について「世の人」を通して、円融天皇のなさり様を口を極めて非難している。一粒種の一の皇子・懷仁親王の母・詮子を差し置いて、子どものいない遵子を皇后・正妻とされた円融天皇を非難するのである。そして遵子を「素腹の后」と渾名付けすることは、結果として子どもが産まれなかった遵子を后に選んだ円融天皇を非難することになるのである。だがこの批判は一面的である。先述したように、円融天皇は先妻の関白の娘を后にしたのである。権力の分散を図ったのである。右大臣兼家に権力が集中するのを少しでも阻止しようとした結果なのではないか。その点では英明の君主である。また懷仁親王の立太子を反対されないように手を打ったのかもしれない。何れにしろ、円融天皇の目論見が成功したか否かは別として、立派に自己の意志を実現させることの出来た天皇である。

だが権力欲に取り付かれた右大臣兼家の不満は大きいのである。すなわち、庚申の夜に突然死した冷泉院の女御超子のことを嘆くにつけ、円融天皇に対する不満が昂じて行く。そして堀河殿兼通から受けた仕打ちより、今回の帝から受けた仕打ち・遵子が立后し詮子が女御に留め置かれた件は、あきれ返った惨い仕打ちだと憤懣を募らせる。先述したが

『栄花物語』巻第二では第（一三）節から（一六）節にかけて、詮子の方が、堀河殿の娘・中宮嬪子を恐れず、遵子より先に入内したのであると描いていた。関白頼忠は関白に推挙してくれた堀河殿に恩義を感じ、中宮嬪子の没するまで、娘の入内を我慢していた。頼忠は実に義理堅く堅苦しいのである。遵子は中宮嬪子没後に入内したことになる。詮子の方がずっと先妻なのである。

詮子の入内は、関白兼通と弟兼家の兄弟の権力闘争を描くなかれの中で描かれていた。兼通の没後、兄兼通の娘・中宮嬪子を恐れずに真っ先に詮子が入内したことを強調した描かれ方であった。『栄花物語』の読者は印象深くこの点を覚えていたろう。中宮嬪子存命中は遵子の入内見合わせ、詮子が先妻で、遵子が後妻というこの『栄花物語』の改変は、この部分で効果的に生きてくるのではないか。

帝は、先妻で一の皇子の母である右大臣の娘・梅壺の女御を差し置いて、後妻で皇子もいない弘徽殿の女御を中宮になさったのである。弘徽殿の女御は関白の娘である。帝は関白を恐れ憚られたのである。右大臣の帝に対する不満はやるかたがない。その点では帝の性格は、「雄雄しき方やおはしまさざらん」といった様子なのである。

憤懣やるかたない右大臣の様子を、

東三条の大臣「命あらば」とはおぼしながら、猶飽かずあさましき事におぼしめす。院の女御の御事をおぼし歎くに、又、「この御事を世の人も見思ふらん事」と、なべての世さへ珍かにおぼしめして、かの堀河の大臣の御しわざはなににかはありける。此度のみかどの御心掟は、ゆゆしう心憂く思ひきこえさせ給ふもおろかなり。「かばかりの人笑はれにて、世にあらでもあらばや」とおぼしながら、「さりともかうて止むやうあらじ。人の有様をば、我こそは見果てめ」と強うおぼして、女御の御事ののち、いとど御門さがちに、男君達すべてさべきことどもにも出でまじらはせ給はず。内の御使女御殿に日々に参れど、二三度がなかに御返は一度などぞ聞えさせ給ける。

一品の宮もいと心憂き事おぼし申させ給ふ。

(第(二七)節。
①二五五頁。)

と、兼家は長生きすればとは思ひながら、やはり嘆かわしい事と思つてゐる。頓死した冷泉院の女御超子のことを嘆くにつけ、詮子が遵子に立后の先を越されたことを世間で噂するだろうと。世の中一般でも今まで経験したことも無いひどいことだと思ひ、あの惨かつた堀河の大臣から受けた仕打ちなど何ほどの事があるうか。今回の帝の御なさり様は、とても思まわしくて嘆かわしいと思うのも、言うも愚か当然のことである。これほど世間の物笑いの種にされて、生きていたくないものだと思ひながら、そうは言つてもこのままでは終わらない、人の有様を自分こそ見届けようと兼家は強く心に誓う。女御の事が終わった後、門を閉ざし閉じ籠もり勝ちで男の子たちは全て公の儀式などには出仕させなさない。円融天皇からの勅使が女御詮子の許へ毎日のように参上するが、御返事は二三度あるうちに一度だけ申し上げるという状況である。帝の姉の一品の宮も、今度の帝の為さり様については大変不愉快なことにお思い申し上げる。『栄花物語』では不満が沈潜し憤懣やる方ない兼家を描く。かてて加えて、資子内親王をも動員して、円融天皇の決行された遵子の立后を非難する。

兼家は帝との間に一粒種まで成している自分の娘の立后が叶わず、皇子の出来ない閑白の娘遵子に先を越されて、これ以上の屈辱は無いと憤懣やるかたない状況に追い込まれている。右大臣は自ら門を閉ざし一族こぞって東三条の屋敷に蟄居してしまう。それもこれも全て円融天皇のなさり様に原因がある。円融天皇は頼忠に遠慮して「太政大臣の御心に違はせ給はじ」とばかり考えているのである。帝の性根は雄々しくないのである。円融天皇はあの性惡の堀河殿兼通よりずっと性格が悪いのである。円融天皇は兼家の前に、巨大な壁となつて立ちはだかつたのである。

五、帝の退位

円融天皇が退位したいと願う様になったのは、天元二年（九七九）の末であった。「上も年来にならせ給ひぬれば、今は下りさせ給はまほしきに、いかにもいかにも御子のおはせぬ事をいみじうおぼし歎く」と、第（二八）節で、在位期間も長くなり、退位したいと願っていた。しかし、子供がいなかったのを大層お嘆きになっていたと記す。その後、天元三年（九八〇）六月に懷仁親王を得たが、親王の外祖父右大臣兼家は却って不満が募って行く。そして新たな天元四年（九八一）を迎える。そこで円融天皇の愁眉を開く要件は、「今は御子も生れさせ給へり。いかでおりなん」とのみおぼし急がせ給ふ。」と第（二二）節で記すごとく、退位である。そして帝は自身の退位の件を急かせるのである。帝の愁眉の点は、梅壺の女御・詮子が里がちである点にある。右大臣兼家は、詮子親子を実家に人質に取り、円融天皇を心理的に追い込んでゐる、愁眉を深くさせるのである。円融天皇の一の皇子を得たという点で、天皇が受ける右大臣兼家の精神的圧迫感はすさまじいものがある。兼家と円融天皇との間は陰悪な状態であった。

天元五年（九八二）三月の、関白の娘遵子の立后以降、『栄花物語』の円融天皇関係の叙述では天皇の退位へと話題が急傾斜する。第（二七）節で遵子入内について円融天皇を非難し、続く第（二八）節では東三条家の掌中の珠ともいべき懷仁親王の着袴の儀式関連へと記事が移る。

若宮のうつくしうおはしますらんも、今年は三つにならせ給へば、秋つ方御袴着の事あるべう、内には造物所に御具どもせさせ給ひ、その御事どもおぼしまうけさせ給ふべし。

（第（二八）節。
①一五六頁。）

懷仁親王はとても可愛らしくいらしかった。今年三歳におなりなので、秋に着袴の儀式を行うべく、帝におかれては

造物所に命じて道具類の支度をさせなさる。そしてその準備に心をお砕きになる。

秋と考えられていた懷仁親王の着袴の儀式は十二月に行われた。円融天皇にとっては懷仁親王がとても大切で気がかりなのである。第〔二九〕節では懷仁親王に注ぐ円融天皇の情愛の深さと、梅壺女御の帝に対する打ち解けない、よそよそしさについて細々と述べる。

梅壺の女御の御けしきもつましうおぼされて、内には、若宮の御袴着の事を、御心の限りおぼし急がせ給ふもさすがなり。それは女御の御ためにおろかにおはしますにはあらで、太政大臣をいと恐しきものに思ひきこえさせ給ふなりけり。この冬若宮の御袴着は、東三条院にてあべうおぼし掟てさせ給ふを、内には「などてか。内にこそ」とおぼしの給はせて、十二月ばかりにと急ぎたたせ給ふ。

女御も参り給て三日候はせ給ふべし。さていみじう急ぎたたせ給て、その日になりて参らせ給ひぬ。その程の儀式有様思ひやるべし。上この親王を見奉り給ふが、いみじうつくしければ、「この女御の御ためにおろかなるさまに見えんは罪得らんかし、かばかりうつくしうめでたくて我継し給ふべき人を」とおぼしめして、いみじき事どもをさせ給ひ、女御をもよろづに申させ給へど、心解けたる御けしきにもあらぬを口惜しくおぼしめす。(中略)四日といふ暁に、女御も若宮も出でさせ給ふ。上いみじうとどめ奉らせ給へど、「今この頃過ぐして、こころのどかに」とて出でさせ給へば、上いと飽かずおぼしめせど、我御心の怠りとおぼしめさるべし。若宮の御有様をいと恋しう御心にかかりておぼしめす。

(第〔二九〕節。①)
(二五八頁。六〇頁。)

梅壺女御のご機嫌伺いも遠慮なされて、帝は若宮の御袴着の事を、御心の及ぶかぎりの準備をなさるのまさすがである。それは梅壺女御御自身に対して粗略な扱いをなさっているのではなく、関白太政大臣頼忠を大変恐ろしいものとお思い申し上げなさるからであった。この冬の袴着は、詮子の里の東三条殿で行おうとお決めたのになつていたのを、帝は

「何で里ですることがあろうか。宮中でせひ」と仰せられて、十二月頃ということ準備をお急ぎになる。

梅壺女御も参内なさり三日間伺候なさるにちがいない。さてそこで大層お急がせなされて当日になって若宮たちは参上なさる。その間の儀式は想像されるがよい。それは素晴らしいものだった。帝は懷仁親王をご覧なさるが、とても可愛いので「この梅壺女御のためにも、この親王に対して粗略な扱いに見えるようであれば神仏の罰を受けるだろう、こんなに可愛い立派で自分の後継をなさる人を」と思ひ召されとても嚴重になさり、女御にも色々とお話なさるが、打ち解けたご様子をお見せにならないのを、帝は残念にお思いになる。

四日目の暁に、女御も若宮も宮中を退出なさる。帝は大層お引き止めなさるが、「今少し時が経過してから、心静かに」と仰有って退出なさるので、帝は名残惜しく思われるが、自分の配慮のなさが原因だと思ひ召されるのだろう。若宮の御有様を大層恋しく気にかかるご様子である。

円融天皇は今までの梅壺女御に対する処遇で、梅壺女御に対して身が縮む思い、引け目を感じていたのだという。遵子の立后など詮子の氣持を傷つける事が多すぎたのである。詮子に対する愛情がない訳ではない。それもこれも全て関白太政大臣頼忠を非常に恐れていた結果だというのである。若宮の着袴の儀を里の東三条第でと女御たちが考えていたのを、帝は内裏で行うようにと諸事準備なさるのである。円融天皇は懷仁親王の件になると俄然氣が強くなり、関白頼忠を恐れなくなるのである。

帝はとても可愛い若宮の懷仁親王をご覧になるにつけても、梅壺女御の為にも、この親王を「おろかなるさまに見えんは罪得らんかし」、「我繼し給ふべき人」と思ひ召されたという。すなわちご自分の後継者、次期皇太子になされようとお思いになったというのである。確実に懷仁親王を後継者とするには、御自身に力のあるうちに東宮の居貞親王に位を譲り、懷仁親王の立太子を確実にすれば良いのである。譲位は早い方が良いのである。懷仁親王は円融天皇の一粒

種である。懷仁親王に他の競争相手が誕生しなければ、御自身の讓位の結果、次期皇太子の位はその一粒種になるのは確実である。懷仁親王に対する愛情が深ければ深いほど、結果として円融天皇の讓位は早まるのである。そうすれば遵子の立后以来、頑なに心を閉ざした梅壺女御の氣持を開くこともできるのである。円融天皇にとって今までの梅壺女御に対する氣の引ける処遇のあり方は、懷仁親王の立太子で帳消しになるのである。梅壺女御の帝に対する「もよろづに申させ給へど、心解けたる御けしきにもあらぬ」状態も解消するのである。

実際に円融天皇の御讓位に関する氣持が固まったのは、天元五年からであろう。一月十日には、帝から御願所となる円融寺に造作のための料爵の事が申し渡される。二月十二日には円融寺行幸の事が太政大臣から奏上される。三月十一日には太政大臣の娘・遵子の立后が行われる。六月五日には、後院・堀河院等の別当として、左大将藤原朝光が任命されるなど着々とその準備が進行する。兼家の氣も収まったのか、七月二日には若宮・懷仁親王の參觀が行われる。年末の二十五日には天皇は後院の堀河院の完成の具合を見るため行幸が行われた(表Ⅲ参照)。

表Ⅲ ㊦「日本紀略」、㊦「小右記」による。

年		月	日	記	事
天元五 九八二		一月	十日	召下官被仰云、円融寺申造作祈爵、㊦	
		二月	十二日	今日大相府被奏円融寺行幸事、件円融寺是御願所、(中略)仰云、行幸事可催行之由、可仰大納言重信者、件卿彼寺別當、㊦	
		三月	十一日	以女御從四位上藤原遵子。立爲皇后。㊦	

天元六 九八三 (永観二)						
六月 五日				乙丑、參殿、次參内、以左大將爲後院・堀河院等別當、以左近中將正清・下官等爲堀河院別當、①		
七月 二日				辛卯。懷仁親王參観。②		
十二月廿五日				壬午。天皇自職曹司遷幸堀川院。件院爲後院。公家被造之。③		
正月十八日				於堀川院賭弓。④		
三月廿二日				戊寅。新造御願圓融寺供養。准御齋會。行事大納言源重信。權左中弁同致方等也。⑤		
十月廿五日				於圓融院始修般若會。講訖。音樂。一如御齋會。今日。右大臣天台横川建立藥師堂被供養之。⑥		
十一月廿七日				戊寅。天台横川右大臣新造惠心院設大法會。座主大僧正良源以下參會。有音樂。⑦		

天元六年(九八三)正月には、改築なった堀川院で賭弓があり、三月二十二日には、新造の円融寺で供養が行われた。十月二十五日には円融寺では般若会が行われ、その日右大臣兼家は横川の薬師堂で同じく供養を行っている。円融天皇の譲位と懷仁親王の立太子の準備と祈願が着々と行われている。

円融天皇は譲位のことをお急ぎになる。それが若宮に対する懸念心配ごとを払拭することになる。第(三)節では、

年月の展開は早い。永観元年(九八三)から永観二年(九八四)へ早々と一年が経過してしまふ。そして円融天皇の讓位の件一色に染まって行く。

かかる程に年号もかはりて、永観元年といふ。正月よりはじめ、ことども世の常にて過ぎもてゆく。その事とある折こそあれ、はかなく月日も過ぎもて行くに、若宮を心安くもあらずもてなしきこえさせ給ふを、内にもいと苦しうおぼしめすべし。上、「今はいかでおりにん」とのみぞおぼさるるうちに、御もののけも恐しう繁う起らせ給ふにも、冷泉院は猶例の御心はすくなくて、あさましくてのみ過ぐさせ給ふに、はかなくて永観二年になりぬ。「今年だに必ず」とおぼしめして、人知れずさるべきさまにおぼしめさるべし。東三条の大臣たはやすく参り給はぬを、いと怪しうのみおぼしわたる。梅壺の女御の御許にも、若宮の御祈心ことにせさせ給ふ。かくてさるべきつかさかうぶりなど、多く寄せ奉らせ給ふ。

(第(三二)節。
①一二六頁。)

と、若宮の着袴の儀式が終わってそうこうしているうちに年も改まって永観元年になった。永観元年(九八三)は正月から諸事例年の如く、何ということもなく月日が経過してゆく。東三条では若宮を安心できない状態で御養育なさっているのを、円融天皇も大層心苦しく思っているらしい。帝は「今は早く退位したい」とばかり考えていらっしやる中にも、恐ろしい物の怪も度々御発病になる。冷泉院は相変わらず普通の状態でいらっしやることは少なく、あきれるような状態でお過ごしになっているうちに、永観二年(九八四)になった。「今年はず譲位したい」と思召して、内々に色々と御讓位の準備をなさっているのだらう。東三条の右大臣が容易に参内なさらないのを、帝は大層不審な事だと思ひになっている。梅壺の女御の御許でも若宮の為の御祈禱を嚴重になさる。そこで帝の方から然るべき官位とかをたぐさん御寄進なさる。

第(三二)節でも、せっかちに早回しで時間が過ぎて行く。そこには右大臣や詮子にとっては重大事件であらうと思

られる、三月の東三条院の火事など全く記されていない。ただ時間が「はかなく過ぎもてゆきて」と記されるだけで、『栄花物語』の世界から消えている。天元二年(九七九)の末から退位の希望を抱いていた円融天皇が、退位の決意を右大臣兼家に語るのには『栄花物語』では退位の一ヵ月前の永観二年(九八四)七月である。この間、帝は退位の希望を全く兼家には語らなかつたのであろうか。誠に突然であり、劇的な場面展開となっている。

時時の事どもはかなく過ぎもてゆきて、七月、相撲も近くなれば、「これを若宮に見せばや」との給はすれど、大臣少しふさはぬさまにて過ごさせ給ふに、度度「大臣参らせ給へ」と内より召しあれど、みだり風などさまさま御障どもを申させ給ひつつ参らせ給はぬを、相撲近くなりて、頻に「参らせ給へ」とあれば、参り給へれば、いとこまやかに御物語ありて、「位につきて今年十六年になりぬ。いままであべうも思はざりつれど、月日の限やあらん、かく心より外にあるを、この月は相撲の事あれば騒しかるべければ、来月ばかりにとなん思ふを、『東宮位につき給ひなば、若宮をこそ東宮には据ゑめ』と思ふに、祈所所によくせさせて、思ひの如くあべう祈らすべし。おろかならぬ心の中を知らで誰誰も心よからぬけしきのある、いと口惜しき事なり。あまたあるをだに、人は子をばいみじきものにこそ思ふなれ。ましていかでおろかに思はん」など、よろづあべき事ども仰せらるるうけ給はりて、かしこまりてまかで給て、女御殿にもなさめき申させ給て、御殿油召し寄せて暦御覧じて、ところどころに御祈使ども立ち騒ぐを、かうかうとの給はせねど、殿の中の人人けしきを見て思へる様、いふもおろかにめでたし。この家の子の君達、いみじうえもいはぬ御けしきどもなり。さて相撲などにも、この君達参り給ふ。大臣の御心の中はればれしうて交らはせ給ふ。

(第(三二)節。①)
(二六四―五頁。)

相撲の節も近づいた七月、帝は若宮に見せたいと仰有るが、右大臣は返事もせずそのままにしていらしやる。帝は度々右大臣に参上するようにおしやる。しかし右大臣は風邪が悪いだとか何だとか色々支障を申し立て参上しない。

相撲の節会が近づき、頻りに参上するようにとの催促があるので、右大臣は参内するのである。すると大層懇ろに帝から御話があって、相撲の節会の準備で騒がしい今月は避け、来月に退位をしたい。については若宮を是非東宮に据えたい。その様に思うので右大臣の方で、若宮の立坊の御祈禱を然るべき寺々に確りやらせて、思い通り立坊できるように祈らせよ。懷仁親王のことを大切に考えている自分の心中を知らないで、誰も彼もが不愉快な様子を見せるのは、とても残念だ。どんなにたくさんいても、人は子どもを可愛いと思うものだ。まして一粒種だ、どうして疎かに思うだろうか。と帝は積年の思いのたけをお述べになる。そして万事、立太子についてなすべき事柄を右大臣兼家に仰せつけられる。話を承った兼家は畏まって退出し、梅壺女御殿にこっそりとお話になり、御灯火を取り寄せて暦をご覧になる。そして、彼方此方の杜寺に使いに出掛ける御祈禱の使者がざわざわと騒がしい。殿はこうこうだとはっきりおっしゃらないが、邸内の人々が様子を見て察している有様は、いうまでもなく素晴らしい。東三条殿の若君達は表し様もない位嬉しそうである。こうして相撲の節会などに、この君達も顔をお見せになる。右大臣も心の中は晴れ晴れとして宮仕えなさる。

円融天皇からの再々の呼び出しに、兼家はあれこれと屁理屈をつけなかなか応じようとしないう。帝を精神的に追いつめているのである。再度のしつこいお召しに兼家は参上する。そこで帝から来月退位すると懇ろに話されるのである。そして帝から、懷仁親王の立坊のこと、親として子を思う氣持を語る語られるのである。

帝の話を承った右大臣は、自第に取って返し、他人に洩れないように氣を使いながら、女御に帝の御決断を密めやかに語る。そして善き日を探すために灯明まで引き寄せて暦を繰っているのである。満面に笑みを浮かべたであろう老いた右大臣のひそひそ話や、夜遅くまでこっそりと暦を調べる姿は誠に鬼氣迫るものがある。

また一面、大変滑稽な姿ではないか。帝の退位のための準備は、円融寺を御願寺にしたり、堀河院を改装し後院の別

当を定めたりと、既に世間周知の事実ではないか。それを如何にも真しやかに帝の退位を語る老いた大臣。帝の退位の後、大臣の掌中の珠・若宮は立太子するが、大臣の望んでいた一人・摂政や関白には、今回もやはりなれないのである。待ちぼうけを食らわせられるのである。大変滑稽な右大臣の姿ともいえよう。

そして退位の当日となる。引き続き第(三三)節で、

かくて八月になりぬれば、廿七日御讓位とてのしる。その日になりぬれば、みかどはおりさせ給ひぬ。東宮は位につかせ給ひぬ。東宮には、梅壺の若宮居させ給ひぬ。いへばおろかにめでたし。世はかうこそはと見え聞えたり。

おりゐのみかどは、堀河の院にぞおはしましける。(中略)太政大臣この御世にもやがて関白させ給ふ。中姫君十月に参らせ給ふ。まづほかをはらひ、我一人にておはしませば、さはいへど御心のままにおぼし掟つるもあらべき事なりと見えたる。

①(二三)
七頁

八月二十七日に御讓位だといって大騒ぎになる。その日になると帝は退位なさる。東宮が位におつきになる。新しい東宮には梅壺女御の御腹の若宮がお立ちになる。いうまでもなく素晴らしい。世の中はこうでなくてはと見聞された。退位された帝は堀河院にお住まいになる。

太政大臣頼忠は前代か引き続き関白におなりになる。関白の中の姫君が十月に新帝のもとへ入内なさる。他の人々の娘を押し退けて、頼忠は自分が一人であるから、中の姫君・謁子の事を思い通りになさろうとするのも当然だ。

右大臣は、娘の産み奉った若宮の立坊には成功するが、今回も関白にはなれなかったのである。念願の一つは叶ったが、今一つは叶わなかったのである。

天元六年(九八三)以降は円融天皇の讓位の件一色に染まって行く。そこでは、関白を畏れる帝は全く描かれていない。

種々嫌な思いをさせ圧力をかける、若宮の祖父でもある右大臣に悩みながらも、帝は御自分で退位のことを推進して行くのである。そこでは腰の定まらない帝ではないのである。きちんと自立した立派な円融天皇像が描かれている。

退位後の円融院は、立派な帝として賛美されるようになる。例えば、巻第三「さまざまのよろこび」では、

花山院
院はいみじうめでたくておはします。冷泉院こそ、あさまじうおはしますかひなき御有様なれ、この院は、いみ

じう多くの人靡きて仕うまつれり。

(第(二)節。
①一三五頁。)

と、花山院は大変御立派な様子である。冷泉院はまあ、情け無い状態で生きていても甲斐の無いご様子である。円融院は大変多くの人々が心を寄せてお仕えしている。三人の院の中でも、円融院は特に人望が厚いと、『栄花物語』では記すのである。

また円融院の崩御を記す、第(四八)節においても、

さておぼつかなさをおぼしきこえさせ給ふ程に、日来ありて正暦二年二月十二日にうせさせ給ひぬ。ここの年来馴れ仕うまつりつる僧俗・殿上人・判官代、涙を流し惑ひたり。いはんかたなし。仁和寺の僧正と聞ゆるは、土御門の源氏の大臣の御はらからにおはす。仁和寺の親王と聞えける御子におはす。いみじうおぼし惑ふ。かの釈尊の入滅の心地して、「大師入滅、我随入滅給」と憍梵波提がいひて、水になりて流れけん心地する人いと多かり。あはれにかなしともおろかなり。内には一日の行幸の御有様おぼし出でて、恋ひきこえさせ給ふ。

(①一四二頁。)

と、円融院の崩御に当たっては、長年親しみ仕えた僧俗・殿上人・判官代に至るまで涙したのである。また釈尊の入滅時のような心地がした人々が大変に多かったと、最大限の賛美をして記すのである。ここでも多くの人々から好かれ、厚い人望が描かれている。

退位後は、この様な人望の厚い円融院として描かれ、巻第九「いはかけ」第〔七〕節においては「円融院の上、世にめでたき御心掟、たぐひなき聖のみかと申しける」^{九頁}（三）と、「聖の帝」と醍醐天皇・村上天皇と並ぶ理想の帝として仰がれたと記す。まさに最大限の賛美をするのである。

結

この『栄花物語』の叙述からいくつかの特色が読み取れる。まず入内では、兼家は中宮嬪子を恐れず、遵子より早く詮子を入内させる。詮子は、「大納言の女」ではなく「右大臣の女」として入内競争の先陣を切った。嬪子没後の後宮には帝の女御として詮子のみが残った。詮子の立后が「世の人」の口を借りて当然視された。そこへ割り込むのが関白の娘遵子である。遵子の入内は中宮嬪子没後である。遵子は「関白の女」という点が強調されるのに対して、詮子はその人自身に魅力があると記している。詮子と遵子と比較し、詮子の方がずっと人としてチャーミングで魅力的な女性なのであると、強調している。兼家は男性らしく逆境にあっても強く堂々としている。頼忠は誠に律儀な人物である。だが、どこか融通のきかない堅苦しい人物で、実に義理堅く堅苦しいのである。

ここに新たな軋轢が発生し展開する。頼忠の娘と兼家の娘の立后をめぐる争いである。そして、詮子の懐妊が明らかとなる。円融天皇の喜びは一入である。帝と同母の姉、一品の宮・資子内親王も、詮子を鼻屑にしていたのでとても喜んだと記す。天下の衆望は東三条殿・兼家の上に留まったように見えたと記す。一方、詮子の側が安産の祈禱などと、円融天皇を巻き込んでかまびすしくなればなる程、関白頼忠は気持が塞ぎ、面白くなる。そして、かたくなに女御遵子の立后の事を目論んだと記す。心中穏やかでは居られない関白頼忠の気持が描かれている。

六月一日、円融天皇にとって一の宮・素晴らしい男御子が誕生する。天皇は大層お喜びになり、早速に御剣を賜わったと記す。御子が是非とも欲しいと願う父親としての、円融天皇の気持が良く出ている。一の宮の誕生という何にも代え難い、願ってもない幸運が飛び込んだのできたのである。だが兼家たちにとって、喜びが大きい反面、落胆も非常に強いのである。何故ならば、円融天皇は関白頼忠に遠慮し、恐れていらしかった。だから内裏火災の折に、堀河殿の閑院が里内裏となった。また若宮にいたいと願う帝からは、夜昼の区別のない使者が派遣されるのであるが、若宮に会いたいと悩むだけで、煮えきらないのである。堂々と兼家の東三条第まで行幸あれば良いのに。兼家の不満は募り落胆は増幅するのである。

その様な帝の性格を、きちんとして端正ではあるが、男らしく果斷な性格ではないと世間では見ていると円融天皇を批判的に描く。帝の性格が優柔不斷なはつきりとしないので、右大臣兼家は懐仁親王を得たが、警戒心は解かなかったと記す。帝は心持ちにしっかりとしたところがなく、全幅の信頼が置けないのである。右大臣兼家はしっかりとしているのである。帝の不甲斐無い態度に対する、右大臣兼家の不満が鬱積してゆくのである。

この天元三年六月の懐仁親王誕生から年末までは、尊子内親王の入内が大きな事件であった。詮子不在の円融天皇の後宮で、弘徽殿女御・遵子の影響力を殺ぐ目的を持つものであった。加えて、円融天皇の後宮に右大臣の目を光らせておく事が出来たのである。だが『栄花物語』では、右大臣兼家が推進したとみられる、その様な重大な事柄が欠落している。それはただ単に兼通の時代の回想としてつけ加わっている。天元三年はこのようにして暮れるのである。

詮子と遵子の立后の争いでは、『栄花物語』では、遵子立後に積極的な円融天皇、恨みを買うのを恐れ変に遠慮深い関白頼忠、円融天皇の思召しに対して怒り狂っている右大臣と詮子、詮子を応援していて帝の態度を不愉快に思う帝の姉・資子内親王という、人物配置をする。

円融天皇は懷仁親王のためであらう、賀茂社や平野社へ祈願をされる。そして自身の退位の件を急かせるのである。帝の不満は、兼家が詮子親子を実家に人質に取って参内させないのである。右大臣兼家は一人の人でもないからと不満に思ったと記す。右大臣兼家と円融天皇との間は險惡な状態である。一方、関白太政大臣頼忠と円融天皇の間はとても良好である。帝は遵子の立后を推進することで太政大臣頼忠に氣を使うのである。

円融天皇は、世間の人々が皆恐れている右大臣兼家を全く恐れる風も無い。兼家の出来ることと言えば、自第に引き籠もっているしか無いのである。右大臣兼家は手も足も出ないのである。そして天元五年三月に遵子の立后が行われた。遵子の立后について「世の人」を通して、円融天皇を口を極めて非難している。先妻で一の皇子の母である梅壺の女御を差し置いて、後妻で皇子もいない弘徽殿の女御を中宮になさったのである。弘徽殿の女御は関白の娘である。帝は関白を恐れ憚られたのである。

しかし、この批判は一面的である。円融天皇は、先妻の関白の娘を后にしたのである。権力の分散を図り、右大臣兼家に権力が集中するのを少しでも阻止しようとした結果なのではないか。また懷仁親王の立太子を関白から反対されないように、遵子の立后と取引されたのかも知れない。何れにしろ、立派に自己の意志を実現させることの出来た天皇である。

だが右大臣兼家の不満は昂じて行く。遵子の立后は、兼通から受けた仕打ちより惨いと憤激を募らせる。不満の表明が、参内しないこと、させないことであった。帝からの勅使が詮子の許へ毎日のように参上するが、御返事をすっぱかすことであった。姉の一品の宮も、帝のなさり様については大変不愉快なのである。『栄花物語』では不満が沈潜し憤激やる方ない兼家を描く。かてて加えて、資子内親王をも動員して、円融天皇のなさった遵子の立后を非難する。それもこれも全て円融天皇に原因がある。円融天皇は頼忠に遠慮し、恐れてばかりいる。帝の性根は雄々しくないのである。

円融天皇はあの性悪の堀河殿兼通よりずっと性格が悪いのである。円融天皇は兼家の前に、巨大な壁となって立ちはだかったのである。

遵子立后の後、円融天皇の讓位となる。帝の話を承った右大臣は、女御に帝の御決断を密めやかに語る。そして灯明まで引き寄せて暦を繰っている姿は誠に鬼気迫るものがある。また一面、大変滑稽な姿ではないか。帝の退位は、既に世間周知の事実ではないか。それを真しやかに語る老いた大臣。帝の退位の後、若宮は立太子するが、一人人にはならないのである。待ちぼうけを食らうのである。大變滑稽な右大臣の姿ともいえよう。

きちんと自立した立派な円融天皇像が描かれている。

退位後の円融院は、花山院や冷泉院等と比較し、三人の院の中でも、特に人望が厚いと、『栄花物語』では記すのである。円融院の崩御に当たっても、祇尊の入滅時にたとえ、厚い人望が描かれている。退位後は、このような人望の厚い円融院として描かれ、巻第九「いはかげ」第〔七〕節においては「聖の帝」と醍醐天皇・村上天皇と並ぶ理想の帝として仰がれたと記す。まさに最大限の賛美をするのである。

註

註一 松村博司著『栄花物語全注釈一』一七四頁、巻第一〔六九〕節・補説で「史実の改変」と記しているが、これは円融天皇の元服前後の記事にもあてはまる。

註二 「二代要記」丙集、円融天皇の「皇后藤遵子」条に「天元五年三月十一日爲皇后年二十六」とあり、それよ

り逆算。

註三 「日本紀略」長保三年閏十二月廿二日条に「東三條院崩于行成卿第一。年四十。」とあり、それより逆算。

註四 松村博司著『栄花物語全注釈一』二三三頁、巻第二（二六）節・補説「女御入内の順序」による。

註五 「日本紀略」天元三年十二月二十一日条に「庚寅。天皇遷御太政官廳。」とあり、円融天皇が太政官庁にお移りになる。

註六 「日本紀略」天元四年一月十三日条に「壬子。齋宮寮雜舍十三字有火。」また同書、天元四年二月九日条「今夜。采女司廳燒亡。」とあり、前年十一月末の内裏の火事以降、内裏の周辺は火事が絶えない。

註七 「日本紀略」天元四年九月十三日の条に「天皇從後院遷御職曹司。」四條後院から職御曹司へと移動している。引き続き、天元四年十月廿七日の条に「天皇遷御新造内裏。東宮遷座昭陽舍。」新造内裏へとお戻りになった。

註八 松村博司著『栄花物語全注釈一』二四〇頁、巻第二（二六）節「〇世の人の御心ざまも」による。

註九 「日本紀略」天延四年六月十八日の条に「癸丑。申刻。大地震。其響如雷。宮城諸司多破壊顛倒。兩京舍屋其數甚多。其中八省院。豐樂院。東寺。西寺。極樂寺。清水寺。圓覺寺等顛倒。地震之甚。未曾有矣。今日寄御輿於南庭。立輦爲御所。中宮廳前同以立輦。今日。清水寺地震之間。縋素壓死之者其數五十。」と大地震の発生を記してから、翌貞元二年二月九日の条に「庚子。巳時。大地震」とあるまで「日本紀略」には群発する多数の地震の記事が見られる。

註十 「日本紀略」天延三年四月三日の条に「前女御從三位藤原懷子薨。年四十。皇太子并齋院母也、寛和元年五

月一日の条に「前齋院二品尊子内親王薨。年四十。」とある。天元三年（九八〇）十月の入内で、寛和元年（九

八五)五月の薨去であるから、六年間の妃としての生活をする。

註 十一 「日本紀略」天元四年十月廿七日の条に「天皇遷_ニ御新造内裏_一。東宮遷_ニ座昭陽舍_一。」とある。

註 十二 「小右記」天元五年一月三日の条に「右府・按察大納言爲光・左大將朝光・參議佐理相率參入内、於梅壺上直廬有盃酒、」とあり、右大臣兼家は父師輔縁の大納言爲光や左大將朝光あるいは実頼縁の佐理を率いて参内し、詮子の梅壺の上直廬で盃酒が行われている。「小右記」によればその他、元日の節会にも、十九日の賭弓にも、兼家は確りと出仕している。また「小右記」天元五年一月二十八日の条に「今朝院女御頓滅云々、梅壺今夜退出」とあり、天元五年一月二十八日の朝に冷泉院の女御超子が頓死し、詮子はこの夜、姉超子の死によって宮中を退出している。新造内裏に何時から住んでいたかはわからないが、少なくとも三日から二十八日の夜まで、詮子がいたのではないか。

註 十三 「日本紀略」天元五年三月十一日の条に「癸卯。以_ニ女御從四位上藤原遵子。立爲_ニ皇后_一。」とある。

註 十四 「日本紀略」永観二年三月十五日の条に「乙丑。午刻。右大臣家東三條院焼亡。于_レ時天皇御堀川院。東宮御閑院。近隣火事之間。大臣以下皆參。」と天皇が堀川院に、東宮は閑院に、大臣以下全員が集まったとある。「栄花物語」ではこの様な事件には筆が進まないのである。